

農地・農業用施設の野生動物被害とその対策



令和 3 年 3 月

農林水産省 中国四国農政局 農村振興部 農村環境課

はじめに

イノシシ、シカなどの野生動物による農作物の被害が、全国各地で問題となっています。これら野生動物による被害は、農作物だけにとどまらず、水路やため池堤体の損傷に及んでいます。

特にイノシシは、食べ物を探してため池の堤体や水路法面を広範囲に掘り起こしたり、水分が多く土が柔らかい場所にヌタ場をこしらえたりするため、施設の損傷が大きく、管理者の労力負担が大きくなります。ため池堤体の損傷は、近年の豪雨による浸食と相まって、災害の発生につながる危険性が懸念されています。

そもそも、どうして近年、野生動物による被害が増えたのでしょうか？

その理由の一つに、中山間地域の人口減少や離農が上げられます。これにより、人間が里山を管理する頻度が少なくなったほか、農地の耕作放棄が増加しました。つまり、山林やこれに隣接する農地に人間の手が及ばなくなった現状が、獣害を増やすことにつながっているのです。

中国四国農政局では、平成 30 年度より農林水産省の全国調査の下で、こうした農地や農業用施設の野生動物による被害を低減させることを目的として、特にため池周辺における野生動物の行動を把握しつつ、できるだけ簡易な方法で被害を低減する対策を検討してきました。また、獣害対策として侵入防止柵を設置できない道路横断部に、野生動物を侵入させないようにグレーチングを設置した事例の効果をモニタリングにより検証してきました。

本冊子では、その調査事例から得られた結果をもとに、イノシシやシカの農地や農業用施設への侵入頻度を少なくする方策についてご紹介します。



水路脇法面のイノシシによる掘り起こし
防止対策（水路への土壌流入を防ぐ）



道路を伝って農地エリアに入るシカ
の侵入防止対策（グレーチング）

1. 中国四国地方の野生鳥獣被害の状況

(1) 鳥獣による農業被害額

図1は平成25年度以降（最近7ヵ年）の鳥獣による農業被害額の推移を表したものです。農業被害額は、被害対策により、全国、中国四国地方ともに近年減少傾向にあります。しかし、減少は2割程度に止どまり、被害額は依然高い水準にあります。

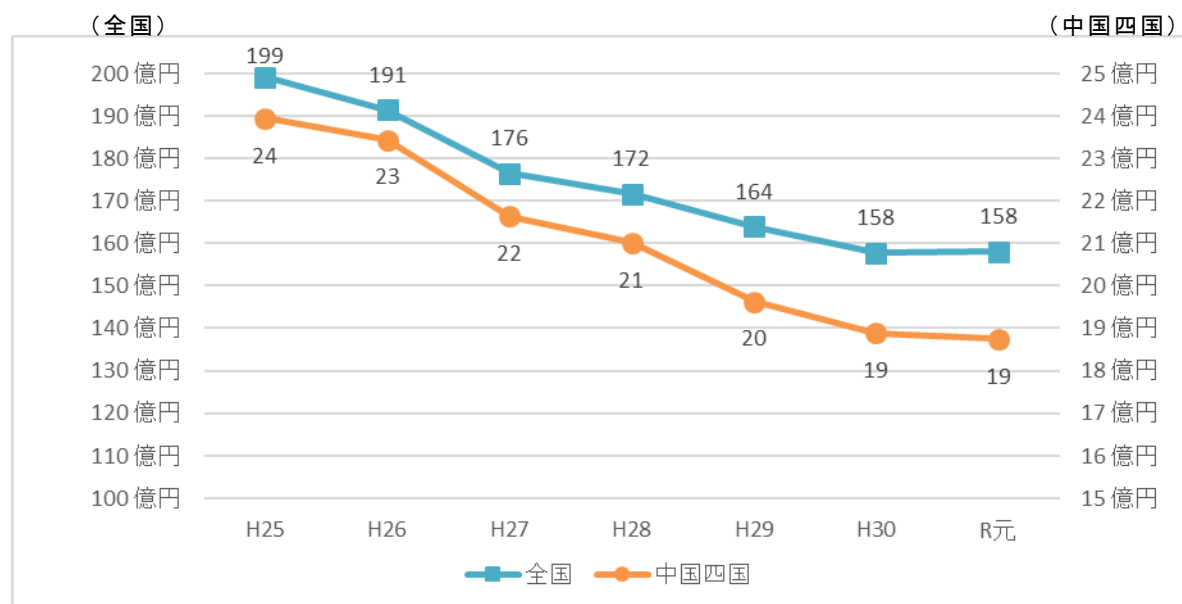


図1 平成25年度以降の鳥獣による農業被害額の推移

(2) 獣種別農業被害額（令和元年度）

主な獣種別の農業被害額についてみると、全国では、イノシシが生息していない北海道の被害状況が大きく反映されて、シカの被害が最も多く（34%）を占めています。一方、中国四国地方では、イノシシによる被害が61%と最も大きな割合を占めています。

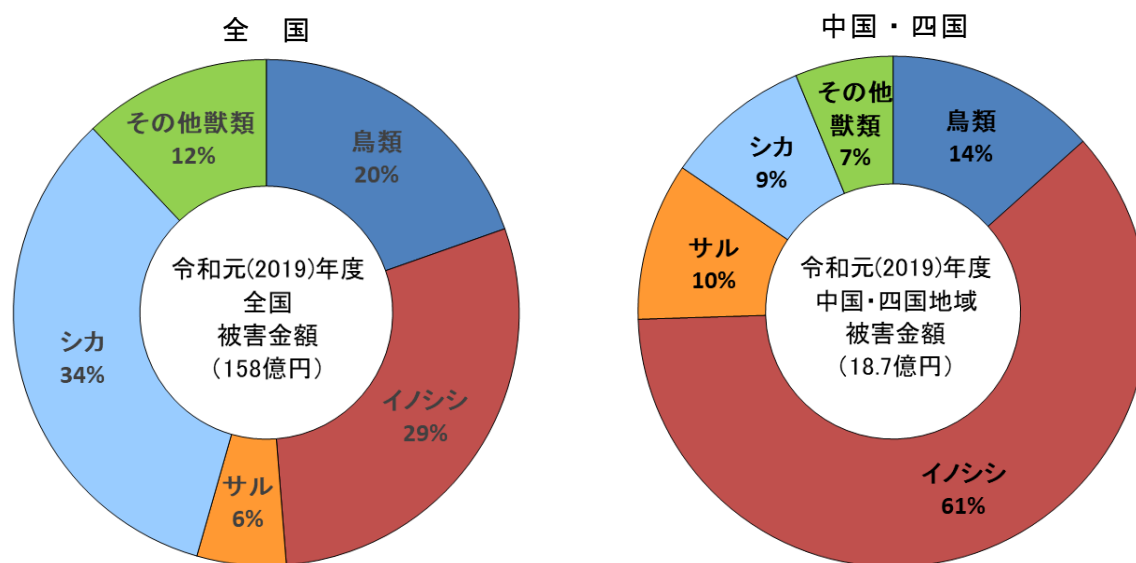


図2 令和元年度全国及び中国四国における農作物被害額（獣種別）

2. ため池やその周辺におけるイノシシ被害の実態と特徴

(1) イノシシの活動実態

ため池における野生動物の活動状況を把握するため、岡山県真庭市（調査期間：H30.11月～R3.2月）、広島県府中市（調査期間：R1.7月～R2.2月）、香川県高松市（調査期間：R1.7月～R3.2月）のため池（計5箇所）を対象として、糞や足跡など動物の出現した痕跡を確認するフィールドサイン調査と、暗い夜間でも撮影可能な赤外線センサーカメラによる行動の観察を行いました。

調査の結果、ため池を最も頻繁に利用していたのはイノシシでした。イノシシは、草刈りが行われていないため池では、住宅の近くであっても夜になると頻繁に出没し、堤体を掘り起こす行動が多く観察されました。

また、親（雌）と多数のウリ坊からなる家族が居ついているため池や、出産のための巣を堤体上に作っているため池も見られ、利用・管理されなくなり水位の低いまたは湿地化したため池は、水飲み場やヌタ場（泥浴び場）としてよく利用されていました。



天端で土を掘り起こす



内法で餌を探す



水を飲む



泥浴びをする



巣材（カヤ）を集める



天端で確認された出産巣の跡

ため池で観察されたイノシシの行動

イノシシは、普段は山や藪の中に潜んでいます。極端に臆病な性質のため、開けた場所に身をさらすことを避け、草が茂ったところを移動しながら活動しています。

このような性質から、**管理が低調になり草が生い茂ったため池や、水位が下がり内法や底面が泥寧化して露出したようなため池は、堤体と地山が接続する部分を侵入路として、イノシシの格好の生活場所になっている**と考えられました。



堤体と山が隣接している



堤体法面の草が生い茂っている



水が少なく湿地化している

イノシシが活動しやすいため池の様子

(2) ため池及びその周辺におけるイノシシ被害の実情

イノシシがよく出没するため池では、堤体の上や法面のあちこちが深く掘られ、余水吐沿いを掘り起こして、その土砂を落として余水吐を埋めていました。また、ため池から周辺に続く獣道が多く確認され、近くの農地や農道では、辺り一面が掘り起こされており、用水路の壁を壊す、道路の法面を崩すといった被害も見られました。

イノシシは、通常、特定の餌を狙うのではなく、掘りやすいところを手あたり次第に掘り起こします。また、護岸や水路などの構造物に沿って掘り進むことが知られています。

このようなイノシシの習性から、農作物への食害のみならず、**ため池や水路、農道などの農業用施設の物理的な損傷や機能低下に被害が及んでいる**ことが判明しました。

管理が低調で、イノシシの格好の生活場所になっているため池は、イノシシの活動拠点となり、周辺に被害を広げている実態がうかがえます。

ため池及びその周辺に見られるイノシシ被害の3つのタイプ

- ①堤体や水路、農道など、掘り起こしによる直接的な損壊
- ②水路や余水吐に掘った土砂を落とすことによる通水機能の低下
- ③餌場や繁殖場所を提供し、地域の生息個体数増加に寄与



ため池法面の掘り跡



ため池の護岸沿いの掘り跡



堤体の獣道から周辺に移動



余水吐に土砂を落とす幼獣



落とされた土砂が堆積した余水吐



壊された水路



ほ場の掘り跡



農道の掘り跡



崩された道路法面

ため池及びその周辺におけるイノシシ被害

(3) ため池にイノシシをひきつける要因

イノシシがよく出没するため池には、イノシシを誘引する魅力や活動上の利点があると考えられます。調査の結果、ため池にイノシシをひきつけるいくつかの要因が見えてきました。

イノシシが利用しやすいため池の立地条件としては、普段の隠れ場所である山や藪と堤体が隣接していること、ヌタ場や餌場となる荒廃農地がすぐ近くにあることなどが考えられました。

また、管理が低調になったことによって、堤体や山際の茂った草むら、放置された掘り跡に雨水が溜まった水溜り、クズやササといった好みの餌植物の繁茂など、イノシシが好むと考えられる環境条件が作り出されていることも、要因になっていると考えられました。

ため池にイノシシをひきつける要因

誘因① 堤体が山に接している。

- ・危険を感じたら、すぐ山に逃げ込める。
- ・山際が藪になっているところは、侵入経路としてよく利用される。



山に接した堤体

誘因② 丈の高い草が茂っている。

- ・ススキなどが繁茂した堤体は、イノシシが身を隠して、安心して活動ができる。
- ・出産巣（寝屋）の巣材も豊富で、その場で集めることができる。



草が繁茂した堤上部

誘因③ 水溜りがある。

- ・掘り跡に雨水が溜まった水溜り、湿地化した休耕地、利用されなくなって水位が低下したため池の岸辺などは、格好のヌタ場や水飲み場となる。



水位が低下したため池の岸辺に作られたヌタ場

誘因④ 好みの餌が豊富

- ・クズやササの根は、イノシシの好物
- ・観賞用の花を植える際に撒いた有機肥料は、その匂いで誘引される。



掘り起こされたクズの根

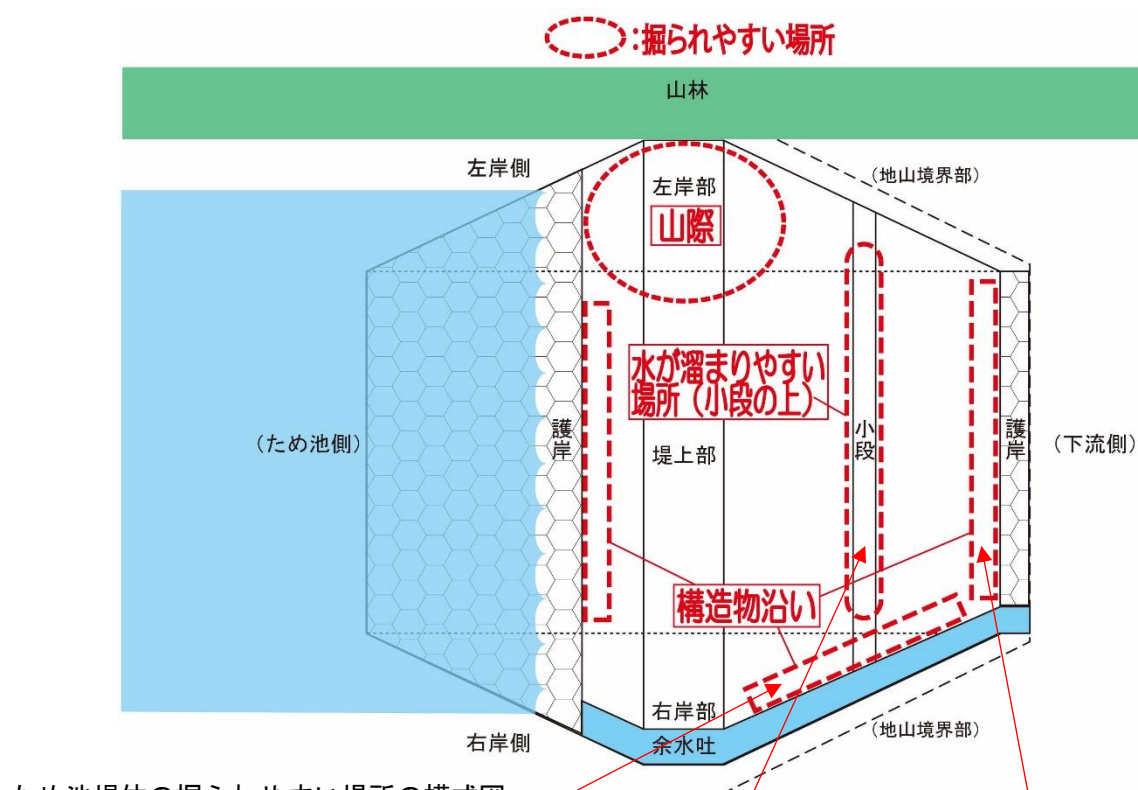
(4) ため池堤体のイノシシに掘られやすい場所

ため池堤体でイノシシの掘り跡を見ると、分布の偏りが見られます。調査結果をもとに、掘られやすい場所を堤体の模式図に示すと、下の図のようになります。

イノシシは、身の安全が第一で、隠れやすく逃げやすい位置を中心に活動します。水が抜けにくいところや山影は、地面が柔らかく、特に掘られやすい場所です。また、護岸や余水吐などの人工構造物沿いも、イノシシの習性上、掘られやすい場所になります。

このような掘られやすい場所に的を絞って、重点的に管理や対策を行うと、比較的少ないコストと労力で効果をあげることが期待できます。

なお、掘られた穴を放置すると、そこに水が溜まって掘りやすくなり、さらに掘り起こされるといふ悪循環につながります。過度な掘り起こしは法面の表層滑りや雨による浸食を助長し、堤体の安全性・安定性が危ぶまれるため、注意が必要です。



ため池堤体の掘られやすい場所の模式図



余水吐沿いの掘り跡



小段の上の掘り跡



護岸沿いの掘り跡

3. イノシシのため池への侵入抑制と被害を低減させる簡易な対策

現地調査の結果、管理が低調なため池でイノシシの掘り起こし被害が多く発生しており、ため池を拠点に周辺の農地や農業用施設にも被害を及ぼしていることが判明しました。

こうした被害への対策としては、ため池の周囲全体を強固な防獣柵で囲うことが最善ですが、設置に大きなコストと労力が必要で、機能維持のためには頻繁な点検と補修が不可欠となります。

そこで本冊子では、イノシシの習性や被害の特性をもとに、イノシシの侵入を 100% 防ぐことはできなくても、侵入を減らし、被害を低減させる簡易な対策をご紹介します。

(1) 定期的な草刈り

用心深いイノシシは、開けた場所に体をさらすことを極端に嫌います。彼らにとっては、身を隠し、安心して活動できる場所があるか否かは、生活の場所としての重要な要素です。

このため堤体では、草の伸び具合を見ながら、年 1～3 回程度草刈りを行うことが、イノシシの活動を抑制する非常に有効な対策となります。



草刈り前（草に隠れて活発に活動）



草刈り後

草刈りは、堤上部だけでなく法面全体も刈ることが理想的です。しかしながら、大きなため池では、管理面積が多大となり、年数回とはいえ草刈りは現実的に難しい場合があります。そのような場合は、イノシシの性質に基づいた**部分的な草刈り**が効果的です。

<部分的な草刈りの事例>

① 対策の内容

堤体の山際、獣道付近、よく営巣する場所などに限定して、定期的に小面積を刈り払い、その場の開放空間を維持する。

② 労力

写真の事例：山際の 5×3m を手刈り、1 人×30 分

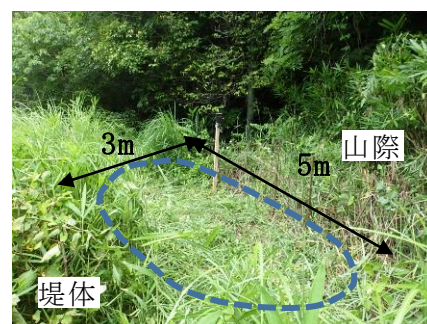
③ 対策の効果

山から堤体への侵入経路が開放的になり、イノシシの出没が大幅に減少し、付近の掘り起こしが無くなった。

例年、堤体上に営巣していたが、対策年は営巣が放棄された。

④ 課題・注意点

定期的（できれば月 1 回程度）に点検し、伸びた分だけ草刈りを行う（1 人×10 分程度）。



堤体山際に限定した草刈り

(2) 水路法面の保護

イノシシは、構造物に沿って掘り進む習性があるので、水路や護岸沿いの法面では、掘り起こしが頻発し、土砂を水路に落したり、水路壁を壊すなどの被害が出ています。

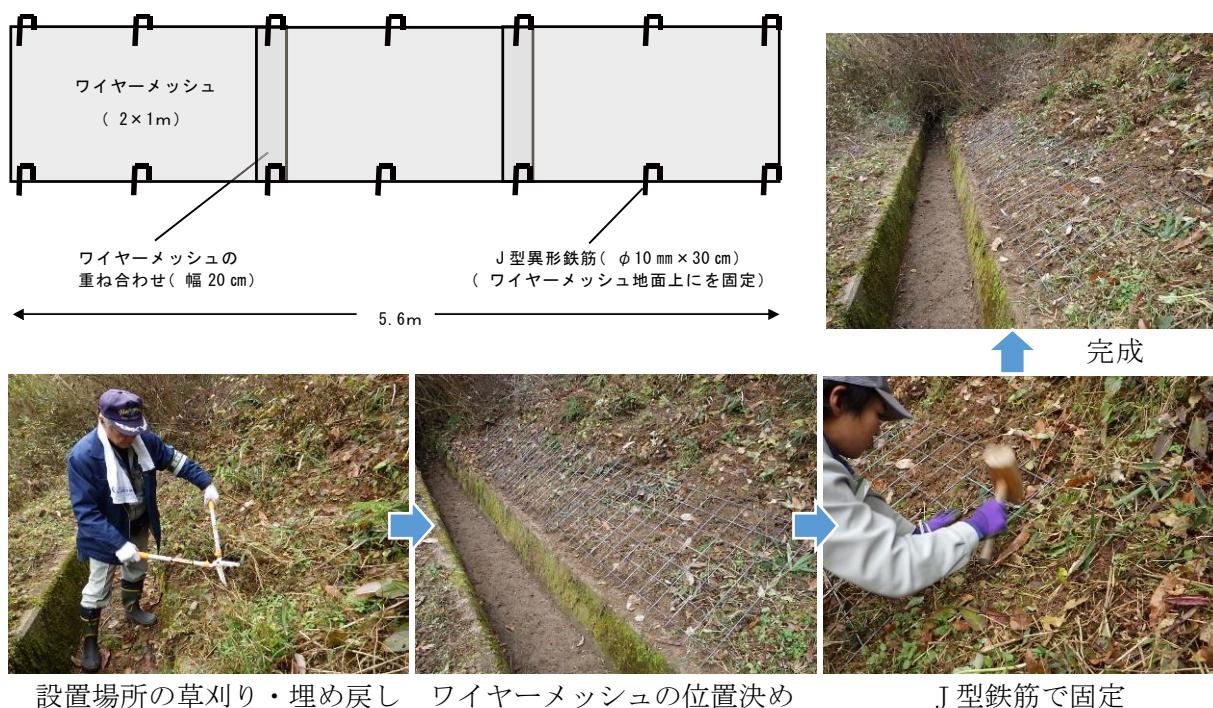
これらの被害に対しては、ワイヤーメッシュで法面をカバーする**掘り起こし防止対策**が有効で、イノシシが上に乗ると、足場が不安定で嫌がるといった効果も期待できます。

<掘り起こし防止対策の事例>

① 対策の内容

イノシシに掘られやすい人工構造物沿いの地面を、ワイヤーメッシュで覆う。

よく掘られる、堤体の内法や外法下部の護岸、用水路、余水吐の側面を対象とする。



② 労力・費用

写真の事例：長さ約 6m、2 人×15 分（設置場所の草刈り：2 人×15 分）

材料費：

資材	仕様等	単価	数量	資材費
ワイヤーメッシュ	線径5mm、サイズ2×1m、目合15cm、重量4.3kg	¥398	3	¥1,194
J型異形鉄筋 (異形ロープ止め)	線径10mm、長さ30cm、重量0.2kg	¥316	14	¥4,424
資材費(税抜き)合計				¥5,618

単価には地域差があります。

③ 対策の効果

設置後、イノシシの出没が大幅に減少し、法面の掘り起こしが無くなった。

掘った土砂が落ちて水路を埋めていたが、これが解消され、通水機能が維持された。

④ 課題・注意点

設置前に掘り跡を埋め戻す（穴を埋めないと水が溜まって崩れやすいため）。

草刈りに大きな支障は無いが、ワイヤーメッシュの損傷や刃こぼれに留意する。

(3) 主要な獣道の遮断

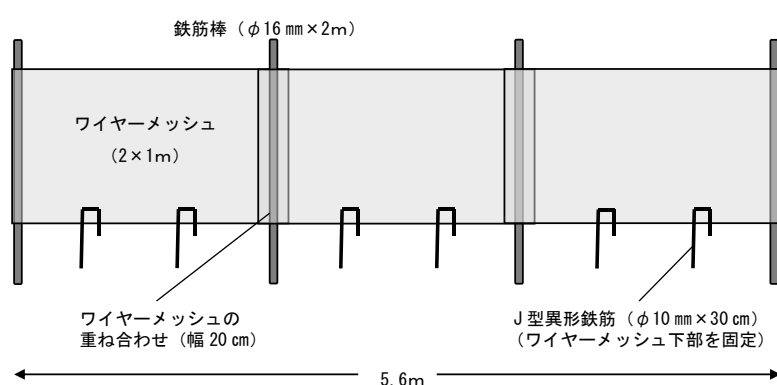
草が倒され、地面が踏み固まっている獣道は、イノシシがよく利用している堤体への主要な侵入経路になっています。そうした獣道を遮断するように、柵を設置します。

下記の設置事例は、余水吐など、ため池に付随する水路構造物をイノシシの侵入防止対策にも生かす設置方法です。この対策は、イノシシの堤体への侵入を完全に阻止するものではありませんが、省力でイノシシ被害を低減させる効果的な侵入防止対策となります。

<侵入防止対策の事例>

① 対策の内容

イノシシがよく利用する獣道をターゲットとし、ワイヤーメッシュ柵で経路を遮断する。



対策前



完成 (対策後)



支柱の打ち込み



ワイヤーメッシュの仮設
(重ね合わせ幅 20cm)



結束バンドで固定

② 労力・費用

写真の事例：長さ約 6m、3 人×30 分

材料費：

資材	仕様等	単価	数量	資材費
ワイヤーメッシュ	線径5mm、サイズ2×1m、目合15cm、重量4.3kg	¥398	3	¥1,194
鉄筋棒(支柱用)	線径16mm、長さ2m、重量3.1kg	¥698	4	¥2,792
J型異形鉄筋(異形ロープ止め)	線径10mm、長さ30cm、重量0.2kg	¥316	6	¥1,896
結束バンド	長さ20mm、耐候性、100本入り	¥712	1	¥712
資材費(税抜き)合計				¥6,594

単価には地域差があります。

③ 対策の効果

設置後、柵に近づくイノシシは見られなくなった。また、堤体での出没も減少し、掘り起こし被害は、大幅に減少した。

堤体によほど魅力的な誘引要因が無い限り、柵を突破してまで入ろうとはしない。

④ 課題・注意点

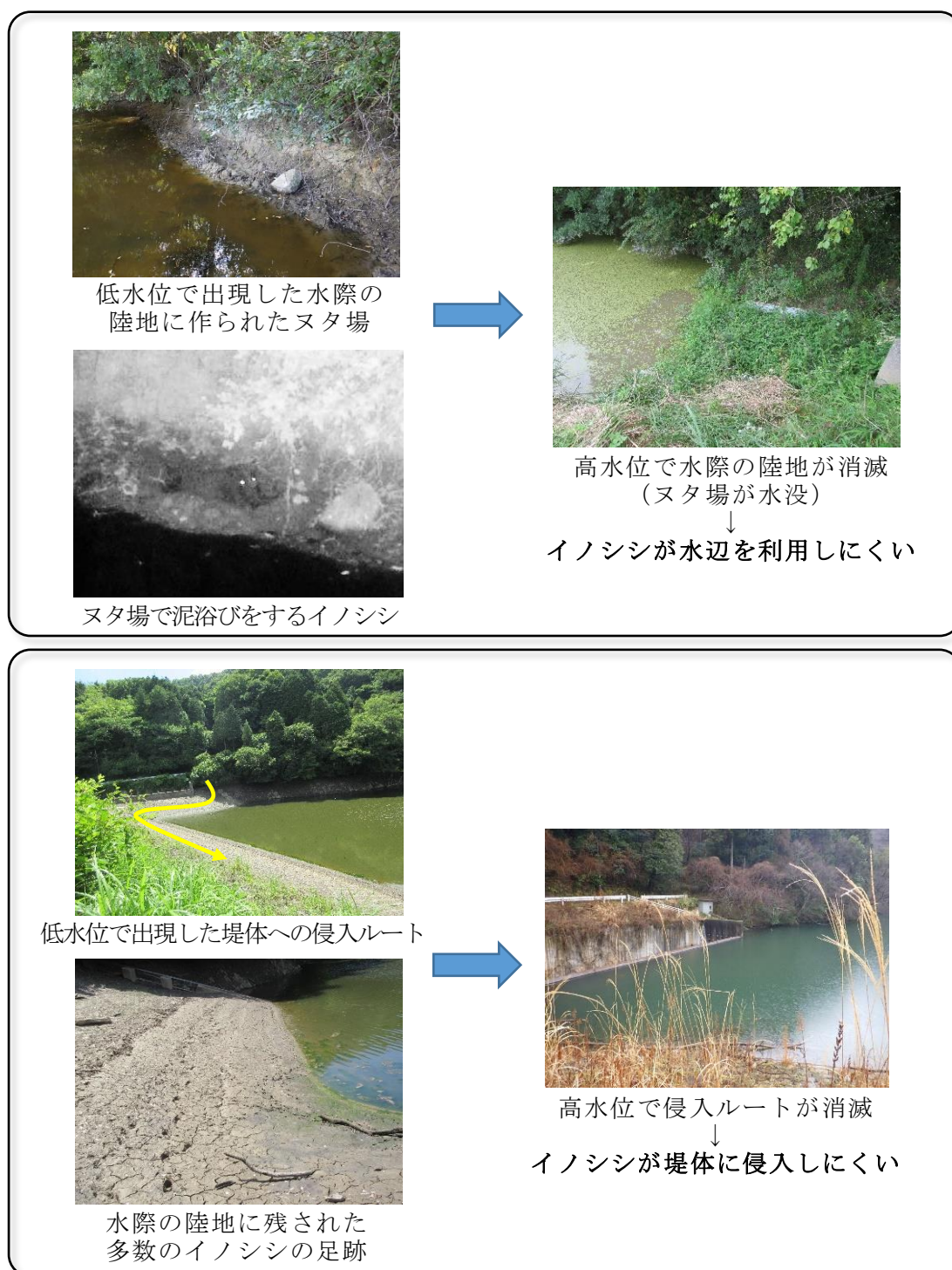
設置後、他の経路からよく侵入するようになった場合は、必要に応じて追加設置する。

(4) 水辺の活動場所の削減

ため池が満水状態の場合、岸辺ががけ状に落ち込んでいて、イノシシが水辺を利用しにくい状態ですが、水位が下がったときには水際に湿った平らな陸地が出現し、水飲み場やヌタ場としての利用が頻発化します。

同様に、水位が高い状態では堤体に近づけないため池でも、水位が低下して水際に陸地が現れると、陸化した部分を伝ってイノシシは易々と侵入することができ、常習的に被害を与えます。

こうしたイノシシの被害を抑制するために、可能であれば、一定程度水位を高く維持して、水際に平らな陸地ができないように、また侵入ルートをつくらないようにすることが有効です。



4. グレーチングを用いたイノシシ・シカの舗装道路からの侵入防止対策

イノシシやシカは、偶蹄（ぐうてい）目という分類に属し、肢先の蹄（ひづめ）が偶数に分かれているのが特徴です。このような蹄を持つ動物は、水路や溝の蓋として使われるグレーチングの上に乗ると、肢が滑り落ちるため、歩きたがらないことが知られています。

農地や農業用施設を侵入防止柵で囲って、イノシシやシカの侵入を阻止する場合、柵の外から中に通じる農道部分には、柵を設置できないのが実情です。

しかしながら、偶蹄目の特性を活用し、侵入防止柵が途切れてしまう道路との交差部分を**侵入防止用グレーチング**にすることで、イノシシやシカの侵入を防ぐことができます。



イノシシの足跡



シカの足跡



(1) 徳島県のみかん園地における設置事例と効果

1) みかん園地の立地概要と侵入防止用グレーチングの設置位置

徳島県の事例では、シカが生息している山林とみかん園地を分けるように広域農道が敷設されており、広域農道沿いにネット柵を張って、広域農道をシカの侵入を阻害する構造物としてうまく活用し、シカの侵入を広く遮断しています。

侵入防止用グレーチング設置以前、シカはネット柵で道路上を遮断できない町道との交差点付近を伝ってみかん園地に侵入していたと考えられ、地元ではこのネット柵と園地に通じる町道の交差部分にあたる侵入口に侵入防止用グレーチングを設置しました。



みかん園地における侵入防止用グレーチングの設置位置

2) 侵入防止用グレーチングの設置状況

侵入防止用グレーチングの構造は、道路を 30cm 程度掘り下げて溝状にし、その上にグレーチングパネルが敷設されています。本事例では、設置箇所は 2 箇所あり、パネル形状が異なる 2 つのタイプ（格子タイプとハニカムタイプ）が設置されています。

格子タイプ
幅 3.0m
奥行き 4.0m



ハニカムタイプ
幅 3.0m
奥行き 2.3m



3) 侵入防止対策の効果（関係農家からの聞き取りをもとに整理）

★対策前

ネット柵と侵入防止用グレーチングの設置前は、みかんの幼木の 8 割程度がシカに被害されていた。



シカに樹皮をはぎ取られたみかんの成木（左）と
被害により立ち枯れしたみかんの幼木（右）

★対策後

始めにネット柵を広域農道沿いに広く設置

→ネット柵の無い町道入り口部分からシカが集中してみかん園地に入り始める。

町道入り口に侵入防止用グレーチングを設置

→みかん園地でのシカ被害が大幅に減少

こうした関係農家の話から、ネット柵と侵入防止用グレーチングの設置により、山側からのシカの侵入は、完全に防げたかに見えました。しかし、赤外線センサーカメラの設置による夜間のモニタリングにより、いくつかの弱点が判明しました。

モニタリングによれば、山側の獣道に設置したカメラには頻繁にシカが現れましたが、その数に比較すれば、侵入防止用グレーチングに近づく個体数は少なく、また、映像にはグレーチングの手前で躊躇し、後戻りする個体も多く見られ、関係農家の印象どおり一定の効果はあったようです。

しかし、一方で、現れたシカの中には、側面の柔らかいネットに身体を寄せ、路肩のコンクリート部分を通過する個体（角の無い雌や角の短い若い雄）や、危険を冒してパネル接合部のやや幅広い部分に脚をかけて通過する個体（雄）が確認されたことから、補足的な対策が必要と考えられました。



コンクリートの路肩部分に肢を置いて通過



パネル接合部の幅広部分に肢を置いて通過

(2) 既設の侵入防止用グレーチングの簡易な改善対策の事例

1) 路肩の通過を防止する対策

路肩に歩くスペースを作らないことが重要です。シカが身体を寄せにくいように側面を金網に取り替える方法もありますが、杭をブロックで固定し、サイドネットを押し出すようにするだけで、通行を遮断することができます。

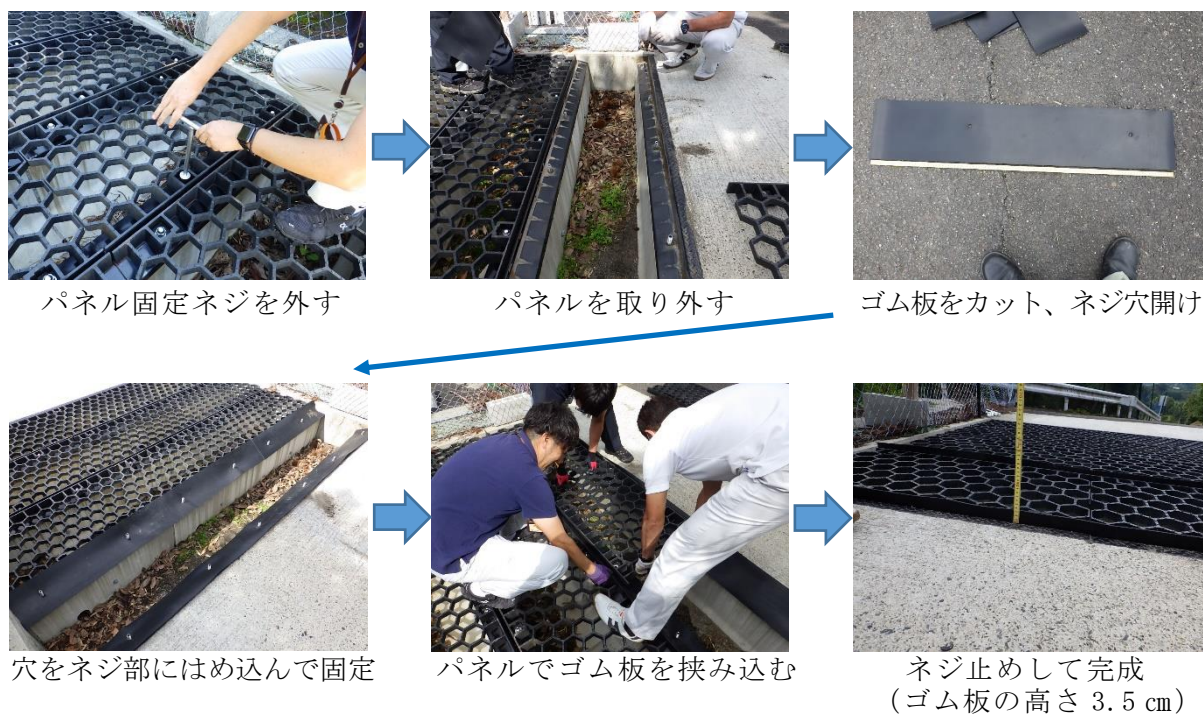


2) パネル上の通過を防止する対策

この対策は人間より夜目が効くシカに対する心理的な対策です。シカが通過の際に脚を置くパネル接合部にゴムシートを挟み、凹凸を作ることで肢の置き場を狭めます。



① ゴムシートの設置手順



② ゴムシート設置の労力・費用

写真の事例：ゴムシート 3m×5枚、4人×1時間

材料費：

資材	仕様等	単価	使用延長	資材費(税抜き)
ゴムシート	厚さ5mm 幅20cm	¥798 (1mあたり)	3m×5枚 (合計15m)	¥11,970

ゴムシートの幅や長さは、施設の規格や構造に合わせて選んでください。単価には地域差があります。

(3) 侵入防止用グレーチング設置上の注意点

1) 侵入防止柵との併用が基本

侵入防止用グレーチングは、侵入防止柵が途切れてしまう道路横断部の対策です。侵入防止柵などで、道路以外の侵入経路をすべて遮断して、初めて効果が得られます。

<侵入防止柵の種類>



トタン柵



ワイヤーメッシュ柵



ネット柵



電気柵

2) グレーチング設置場所の選び方

グレーチングを設置する場所は、以下のことに注意して選定する必要があります。
なお、設置場所の選定にあたっては、地元住民の合意形成が大切です。

① 土砂や落葉が堆積しにくい場所を選ぶ

グレーチングに土砂や落葉が堆積すると設置効果が無くなります。

できるだけ土砂や落葉が流入しない場所を選び、定期的な清掃が必要です。



雨で土砂に埋まったグレーチング

② カーブや勾配のある区間を避ける

雨の日などは、グレーチング上が滑りやすくなります。通行する人や自転車、車などが、スリップする危険性の少ない場所を選ぶ必要があります。その上で、注意を促す看板や白線、反射器などの設置により、グレーチングがあることを知らせましょう。

また、両サイドにネットを設置する場合は、車のサイドミラーなどが引っ掛かりやすくなるため、注意喚起が必要です。



グレーチングの存在を周知する看板

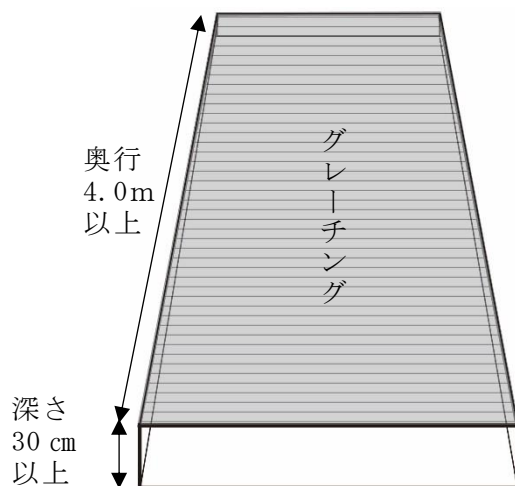


白線での注意喚起

3) 奥行き・深さをしっかり設ける

グレーチングの設置前後で農業被害が顕著に減少するなど、グレーチングの設置そのものにも侵入頻度を低減させる効果が認められていますが、奥行き・深さをしっかり確保することにより、さらに効果が持続する対策となります。

グレーチングの奥行き・深さの目安として、令和元～2 年度に農林水産省が実施したモニタリング等調査で得られた知見を踏まえると、奥行き 4.0m、深さ 30cm 以上を確保したグレーチングでは、シカやイノシシの侵入をかなり高い確率で長期にわたり防いでいる状況がわかってきました。



侵入防止用グレーチングの効果的な奥行きと深さ

4) 通行する車両を想定した強度の確保

グレーチングを大型のトラックなどがよく通行する車道に設置する場合、その重量に耐える製品を選ぶようにしましょう。

(4) 終わりに ～今後、獣害対策を検討する地域の参考として～

1) 樹園地における獣害対策の有益な事例

調査対象とした徳島県の事例では、侵入防止用グレーチングを設置する以前に、農地（樹園地）と山林を区分するように広域農道が整備されていました。この道路が、野生動物と人の営みの境界線となり、道路整備そのものが野生動物の侵入防止対策として一定の機能を果たしていたと考えられます（ステップ 1）。さらに、道路沿いはネット柵の設置・管理がしやすいという利点を生かして、広域農道沿線にネット柵が広く設置されました（ステップ 2）。

しかしながら、その後、ネット柵で封鎖できない園地に通じる町道を伝って、シカが侵入することを学習し、徐々にその頻度が増加するに至りました。そこで、町道の広域農道から園地への入口にあたる部分に、偶蹄目の好まない侵入防止用グレーチングを設置することで、農作物への被害を低減するに至ったものです（ステップ 3）。

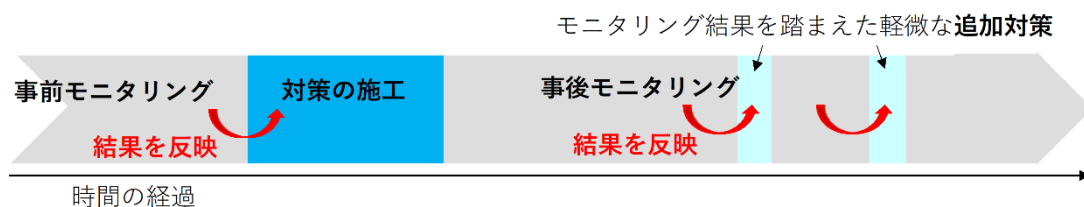
このように、この地区がたどったプロセスは野生動物の行動や性質に応じて対応してきたものであり、山間傾斜地に展開する樹園地における獣害対策のあり方として、先進的かつ有益な一事例と言えます。

2) 対策施工前後のプロセス（モニタリングと順応的管理の重要性）

調査では、実際に侵入防止用グレーチングを整備した現場に赤外線センサーカメラを設置して、対象動物（勝浦町の場合はシカ）の行動をモニタリング。これにより整備した施設の効果を把握した上でその情報に基づいて軽微な追加対策を施し、さらにその追加対策の効果を把握するためにモニタリングを継続しました。このモニタリングの繰り返しにより明らかとなったことが非常に多くあります。

このように、対策後にはモニタリングを行い、整備した施設に弱い部分がないか、動物の慣れにより効果が薄れてないかなどを把握し、地区の事情に応じた追加対策を講じることが大切です。

また、多大な費用をかけて整備する対策であるため、事前にもモニタリングを実施して主要な侵入経路を把握することで、さらに効果的な対策を施すことが可能となります。



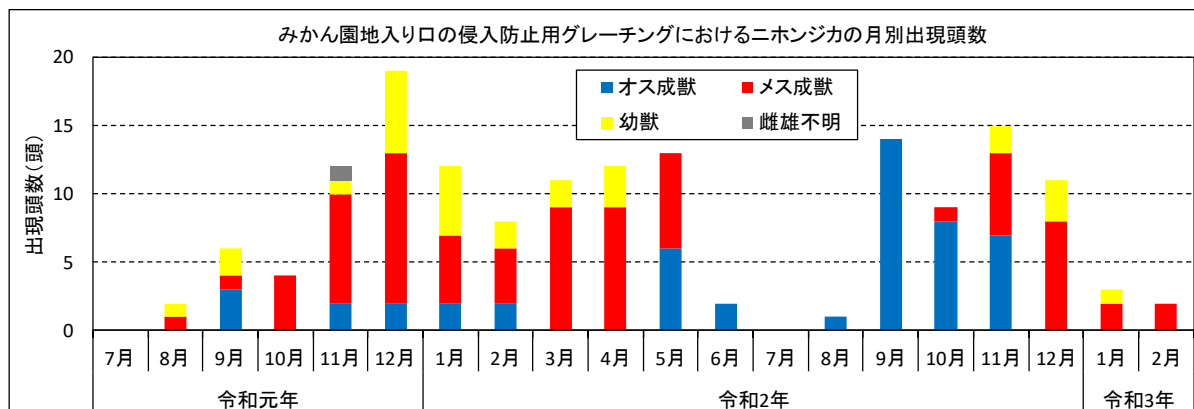
対策施工前後の順応的管理プロセスのイメージ

3) 追加対策の検討にあたって

モニタリングを、年間を通して継続していると、野生動物の行動にも季節感があることが見えてきます（次頁のグラフを参照）。さらに、複数年継続してくると、その傾向に信憑性が増し、年々の気象条件等の違いによる傾向も見えてきます。追加対策の検討にあたっては、このようにモニタリングから得られる情報を有効に活用し、工夫すること

で、より効果的な対策となることが考えられます。

例えば、徳島県の事例では、秋～初冬にシカの出現数が多くなるような傾向が見られました。すなわちこの時期にシカの行動範囲が拡大する可能性があり、この時期に力を入れて獣害対策を講じれば、対策の効果が得られやすいと考えられます。



(備考) 夏は出産のために出現が少なかったと考えられます。

みかん園地の侵入防止用グレーチング付近に出現したシカの月別頭数

<参考情報>

1. 鳥獣被害防止総合対策交付金について

鳥獣被害防止総合対策交付金は、地域の鳥獣被害対策の取組みを総合的かつ効果的に推進するため、市町村が作成した被害防止計画に基づく、地域ぐるみの総合的な取組み等を支援するものです。具体的には、地域協議会による、追払い活動、捕獲活動、緩衝帯整備、侵入防止柵の整備等の取組みが支援対象となります（交付金制度を活用できる対策メニューの詳細は、農林水産省ホームページでご覧いただけます）。

また、農林水産省ホームページ内の「鳥獣被害対策コーナー」では、野生動物による農作物被害対策（研究成果等）やジビエの利活用など様々な情報を掲載しています。是非お気軽に活用ください。

<農林水産省ホームページ「鳥獣被害対策コーナー」アドレス>

<https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/index.html>

2. 野生鳥獣被害対策アドバイザー制度について

農林水産省では、野生鳥獣による農作物被害防止対策を効果的に実施するため、野生鳥獣の生態・行動や農作物被害防止対策に関する専門的な知識や経験を有する者をアドバイザーとして登録し、地域の要請に応じ紹介しています。

アドバイザーによる現地指導、講習会の開催等は、交付金の活用が可能です。地元から、鳥獣被害対策に関する専門家からの助言を受けたい等の要請があった場合、是非ご活用ください。

<アドバイザー制度のホームページアドレス>

http://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/h_adviser/index.html



侵入防止用グレーチングで引き返すシカ

本冊子は、「令和 2 年度農地・農業用施設における動物被害対策手法検討業務」
において、作成したものです。

問い合わせ先：農林水産省 中国四国農政局 農村振興部 農村環境課
086-224-4511（代）

作成協力：愛媛大学大学院 農学研究科 地域環境工学コース 農村計画学研究室